

2022年6月4日(土) 東奥日報17面掲載

折れたブナ 80メートル飛ばされた



突風で折れ約80メートル飛ばされたとみられる直徑約20センチ、長さ15メートルのブナの幹=5月29日、猿倉岳東斜面下方の矢檜蕪付近

一緒に調査した同市の末正明代表は2008年までに、現場付近で同様「和田を愛する会」の久の被害を10回程度確認。

題で、弘前大学大学院理工学研究科の石田祐貴准教授〔気象学〕らが同月29日、被害の追加調査を行った。折れたブナの幹が80メートル飛ばされていたことを新たに確認。石田准教授は今回のデータを基に被害発生当時の風速を推計する。

(館花光秀)

十和田 南八甲田の猿倉岳(標高1353・7m、十和田市)東斜面で5月初旬、局地的な突風が原因とみられる倒木被害が発見された問題で、弘前大学大学院理工学研究科の石田祐貴准教授〔気象学〕らが同月29日、被害の追加調査を行った。折れたブナの幹が80メートル飛ばされていたことを新たに確認。石田准教授は今回のデータを基に被害発生当時の風速を推計する。

“猿倉おろし”風速推計へ

幹や枝散乱 一部登山ルートにも



【写真上】約80メートル飛ばされたとみられる部分。高さ2・5メートルのところから引きちぎられたように折れていた〔同下〕飛ばされた木が立ちはだかる。猿倉岳東斜面下方の矢檜蕪付近。右側に藪がある。

繰り返し被害が発生していることから、今後は同斜面に吹く突風を「猿倉おろし」と呼んで注視していくところ。

今回、根元からの飛距離が新たに分かったのはブナ2本で、うち大きい方の太さ約20センチ、長さ約530センチの幹が80メートルほど飛ばされていた。前回5月7日の調査で判明したオモリトドマツなどと一緒に合わせて4本の飛距離を確認できた。

石田准教授は今後、気象条件をつかのぼって調整を続けている。昨年の雪の降り始めから5月ごろまでに複数回の突風被害があったことがより明らかになった。

菅の脇を通る旧県道と呼ばれる登山ルートにも、呼び名通りの「山岳波やダウンバー」の幹が立ち木に引っかかる。

追加調査では、猿倉岳東斜面下方の矢檜蕪(同1061m)にブナやアオモリトドマツの折れた幹や枝が7日時点より多数散乱しているのも確認。葉の枯れ具合から雪解けに伴い埋もれていたものが現れたとみられ、5月ごろまでに複数回の突風被害があったことがより明らかになった。

菅の脇を通る旧県道と呼ばれるとおり、久末代表は「道を通れなくて(保全が必要な)湿地のへりを歩く入山者も出でてくるかもしれない」と指摘した。

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。
東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koh@hirosaki-u.ac.jp